

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

金塚 B 遺跡

キザワシ遺跡

百合畠遺跡

焼山遺跡

1988

長岡市教育委員会

序

長岡市内には200カ所を超える遺跡があり、そのほとんどは遺跡の規模・内容等が不明である。この報告書は国・県の補助を得て、年次別に遺跡の概要等を解明するため実施した初年度の発掘調査記録である。

調査の結果、遺跡の概要等を知ることができ、今後の文化財の保護や諸開発に伴う保存協議の資料として貴重な手懸かりを得ることができた。

今回の調査にあたり、多大な御指導・御助言をいただいた文化庁・新潟県教育委員会はじめ関係各位に対し、心からお礼を申し上げます。

昭和63年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸山 博

例　　言

1. 本書は昭和62年度の国・県の補助金の交付を受けて実施した「長岡市内遺跡群発掘調査」の報告書である。
2. 調査は長岡市教育委員会が主体となって、昭和62年8月18日から9月12日まで大積地区の金塚B・キザワシ・百合畠・焼山の4遺跡を対象に行った。
3. 遺跡の写真撮影・測量および遺物の整理から図版の作成並びに本書の執筆は小熊博史氏の協力を得て駒形が行った。特に第6図6の土器および石器の実測・トレースは小熊氏による。
4. キザワシ・百合畠遺跡の土層断面図（第8図・第13図）の凡例は焼山遺跡の土層凡例（第19図）と同じである。
5. 各遺跡の出土遺物の番号は挿図・写真図版とも一致する。また、写真図版の遺物の縮尺は約1/3である。

目　　次

1. はじめ	1
2. 金塚B遺跡	4
3. キザワシ遺跡	9
4. 百合畠遺跡	13
5. 焼山遺跡	16
6. おわりに	24
調査体制	24
調査に御指導・御協力を いただいた方	24

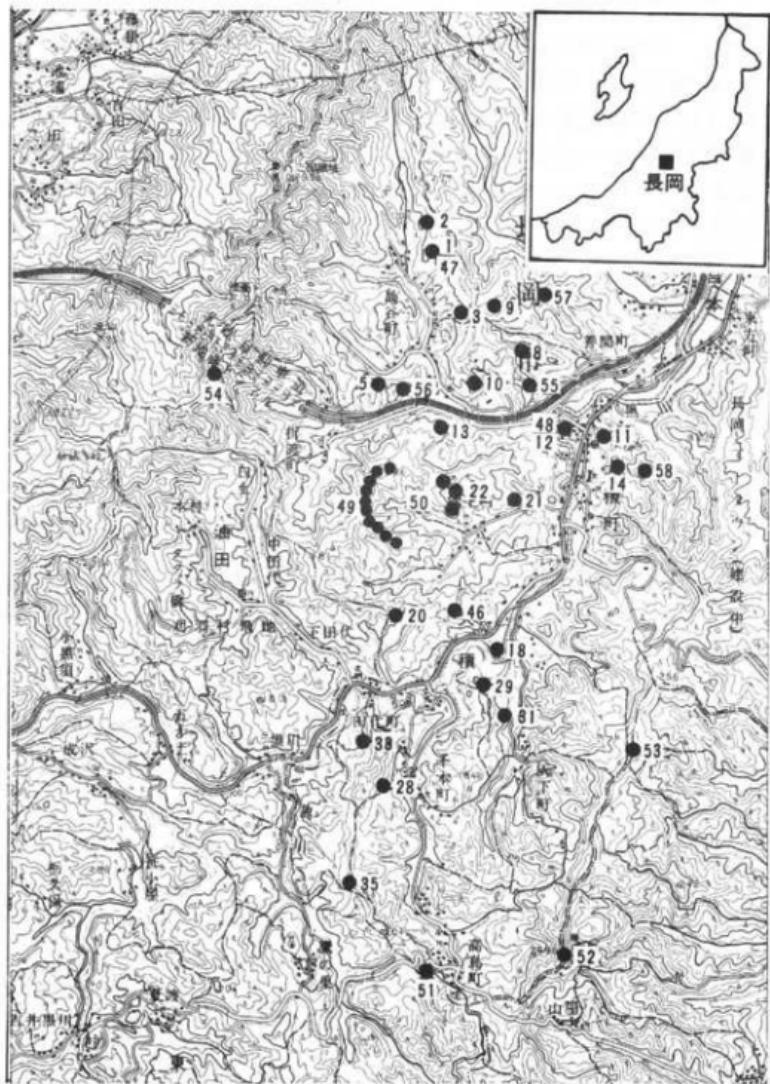
1. はじめに

長岡市大積地区は長岡市の南西部にあって、西は曾地丘陵を挟んで柏崎市・刈羽村・西山町と、東は八石丘陵で越路町と、それぞれ接している。その二つの丘陵の間には北の沖積地で信濃川に合流する黒川が流れ、さらに黒川に向かって曾地丘陵からは熊上川・三島谷川、八石丘陵からは高鳥川・灰下川などの小河川が丘陵を開析しながら東から西へ、また西から東へと流れ込んでいる。大積地区的遺跡は川沿いや丘陵の尾根などの比較的標高の高いところに位置していることが多い。

大積地区における遺跡の調査は、1950年代における丸山松夫氏を中心とした大積中学校（丸山松夫「遠古の郷土—三島郡二和村大積地域の縄文文化」1956年）、中村孝三郎氏の調査（中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館 1966年）、さらに1970年代初めの県下一斉の遺跡分布調査や、これと時期をほぼ同じくして始まった北陸自動車道、「70年代後半からの長岡ニュータウン関連の分布調査や発掘調査がある。」70年代の調査は新潟県教育委員会が主として行ったもので、分布調査の成果は2回にわたって「遺跡地図」（「新潟県遺跡地図」1975年、「新潟県遺跡地図—昭和54年度版—」1980年）として刊行されている。この最新の「遺跡地図」と1956年に発刊された「遠古の郷土」に掲載されている大積地区的遺跡数は「遺跡地図」が31、「遠古の郷土」が43と、最新の成果の方が遺跡数が減少している。「遺跡地図」には「遠古の郷土」に掲載されていない塚や山城跡が含まれているにも関わらずである。戸根与八郎氏はこの現象を「当時の煙が荒廃化し、雜木林等になって遺跡の現状把握が困難な事に起因するものであろう」（戸根与八郎他「埋蔵文化財発掘調査報告書—片田遺跡—」新潟県教育委員会 1977年）と指摘されているが、今年度確認調査を実施した遺跡の現況も同じようなものであった。なお、第1表は「遠古の郷土」（「遠」）、「先史時代と長岡の遺跡」（「先」）、「新潟県遺跡地図—昭和54年度版—」（「地」）に掲載の遺跡や新発見の遺跡（「追」）を比較したもので、確認遺跡の減少がここからも読み取れよう。この現象は大積地区における開発との調整協議を進める上で充分な資料を提供しているとは言えない。また、1980年代後半になって大積地区での開発が下火になったとはいえ、未だ良質な大積の土砂を求めての土取り工事や、丘陵の沢を利用した産業廃棄物処理場の設置が、開発協議の話題に上がっている。長岡市教育委員会はこれら開発との協議資料をより充実したものにするために「遠古の郷土」掲載遺跡をはじめとする遺跡所在地の確認（分布調査）、遺跡か否かの確認及び遺跡地の範囲や遺跡の内容・性格などを探る調査（試掘調査）を昭和62年度から数ヶ年計画で実施することにした。今年度は土取り場近くの金塚B、かつて土取り場にされて一部で工事が行われたと思われるキザワシ、産業廃棄物処理場がすぐ下まで延びてきている焼山、磨製石斧が1点だけ採集されて遺跡かどうか疑わしい百合畠の4遺跡を対象に確認調査を行った。

No	遺跡名	時代・種別	遠	先	地	追	No	遺跡名	時代・種別	遠	先	地	追
1	金塚A	縄文・集落	○	○	○		30	カラコミ	縄文・集落	○		○	
2	金塚B	縄文・集落				○	31	牛池(オシケ)	縄文・集落	○		○	
3	大平	縄・古・集	○	○	○		32	千本山	縄文・集落	○			
4	旧学校林	縄文・集落	○				33	新林	縄文・集落	○	○	○	
5	キザワシ	縄文・集落	○	○	○		34	的場	縄・古・集	○			
6	院の下	縄文・集落	○				35	宮田	縄文・集落		○		
7	コンズガタ	縄・古・集	○				36	前田	古代・集落	○			
8	開墾地	縄文・集落	○		○		37	池の端	古代・集落	○			
9	沢の入	縄文・集落	○	○	○		38	工事場	古代・集落	○			
10	馬平	縄文	○		○		39	小林	古代・集落	○			
11	上の畑	縄文・集落	○		○		40	諏訪神社付近	古代・集落	○			
12	七軒町	縄文・集落	○	○	○		41	中学校庭南	古代・集落	○			
13	ホテラバ	縄文・集落	○		○		42	熊上・元屋敷	古代・集落	○			
14	畠田裏山	縄文・集落	○		○		43	下須田	古代・集落	○			
15	追分	縄文・集落	○				44	津々場	古代・集落	○			
16	ソバクボ	縄文・集落	○				45	中ズンネ	古代・集落	○			
17	ソデウラ	縄文・集落	○				46	熊上経塚	中世・経塚	○	○		
18	平山	縄・古・集	○	○	○		47	三島谷金塚	塚			○	
19	大谷	縄文・集落	○				48	本村金塚	近世・塚群			○	
20	墓沢	縄文・集落	○	○	○		49	熊上の塚群A	塚群			○	
21	百合畠	縄文	○		○		50	熊上の塚群B	塚群			○	
22	焼山	縄文・集落	○	○	○		51	イナマンキ塚群	塚群			○	
23	元灰下	縄・古・集	○				52	楔形城跡	中世・山城			○	
24	下峰	縄文・集落	○				53	水梨城跡	中世・山城			○	
25	論田	縄文・集落	○				54	コ城跡	中世・山城			○	
26	灰下・元屋敷	縄文・集落	○				55	三丁田城跡	中世・山城			○	
27	水の元	縄文・集落	○				56	御堂山城跡	中世・山城			○	
28	花立	縄文・集落	○	○	○		57	善間城跡	中世・山城			○	
29	原新田	縄文・集落	○	○			58	鹿射山城跡	中世・山城			○	

第1表 大積地区の遺跡一覧表



第1図 大積地区の遺跡

2. 金塚B遺跡（第2図～第7図）

所在地 長岡市大積三島谷町字石原坂 1145

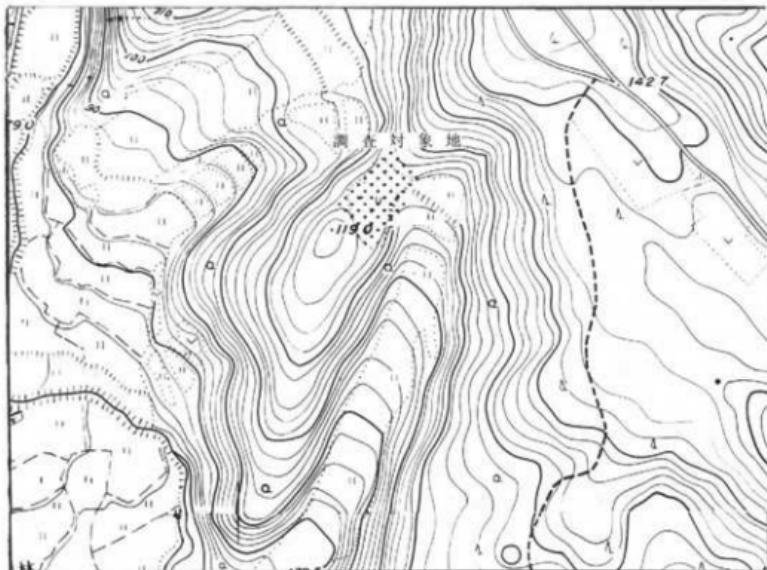
立地（第2図） 南北に走る尾根から約30mほど低くなつて西の三島谷川に向かって突き出た支脈の付け根に位置する。かつては水田であったが、現在はカヤバである。標高は114m。

調査（8月19日～8月24日） 金塚B遺跡は昭和62年春の長岡市史民俗部会の調査の際に、太田教治氏から提供された磨製石斧の採集地が新遺跡の可能性が高いことや、近くで土取り場が存在することから調査を実施することになった。調査は水田であった面に調査グリットを設けて、遺構・遺物の有無及びその分布状況の把握に努めた。

調査の結果 計8ヶ所に調査グリットを設けた（第5図）。縄文土器などの遺物が2・3・8Gなどから出土したが、遺構は検出されなかった。

土層序（第4図） 第I・II層には水田土壤の灰色粘質土が混入していた。遺物包含層は第III層の茶褐色土で、調査地のはば中央部の2～4・8Gに分布していた。だが、8Gには水田に改良した際の土壤と思われる搅乱層が第III層の上にみられた。

遺物（第6・7図） 出土遺物は縄文土器が約50点、磨石17・スクレバー18が各1点。



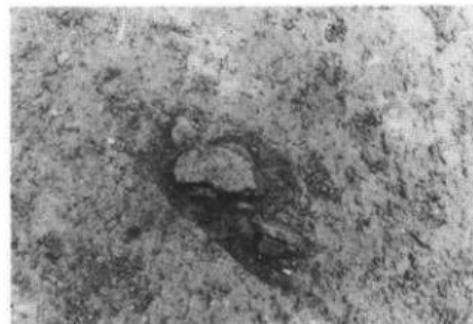
第2図 金塚B遺跡周辺の地形図 (1/2,500)



遠景
(中央後方に工事中の土取場がみえる)



発掘調査風景

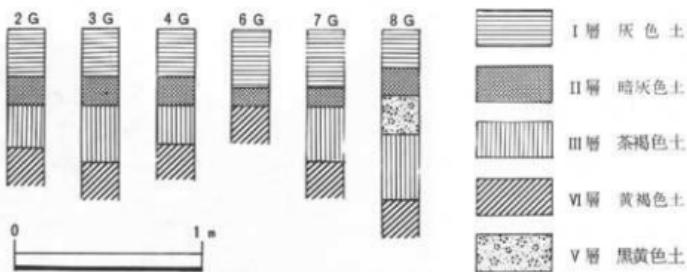


縄文土器出土状況

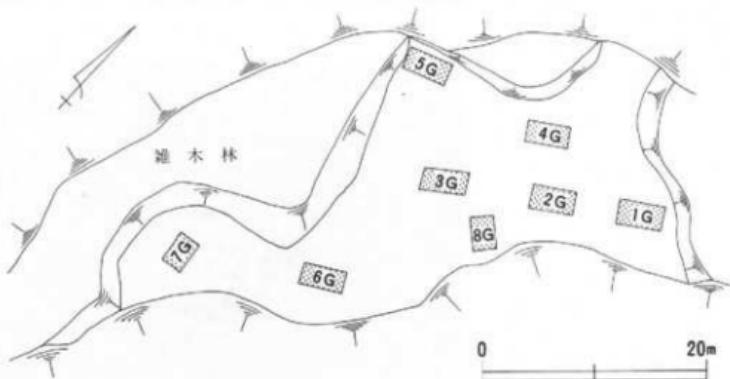
第3図 金塚B遺跡

それに採集の磨製石斧頭が1点ある。縄文土器は縄文早期後半、前期前半それに本遺跡で主体的な中期中葉のものがある。1は土器の内外面に貝殻条痕文の早期後半の纖維土器で、早期はこの1点しかない。2は単節のRLが、3～5は0段多条の縄文(3・4はL字縄文、5はR字縄文)施文の前期前半の纖維土器で、10点近くある。中期の土器は約40点出土した。6はキャリバ一形を呈し、縄文の上に円弧文と懸垂文とが組み合わされる大木8號式と考えられる。その他も中葉の土器で、15は木葉痕の底部破片である。16の磨製石斧は流紋岩製で、17は両面に敲打痕がみられ、凹石としても考えられる。18のスクレーパーは磨石と同じ安山岩を使用。

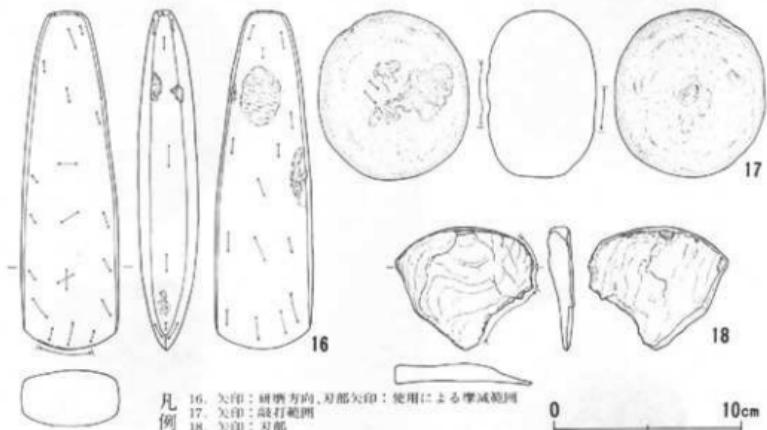
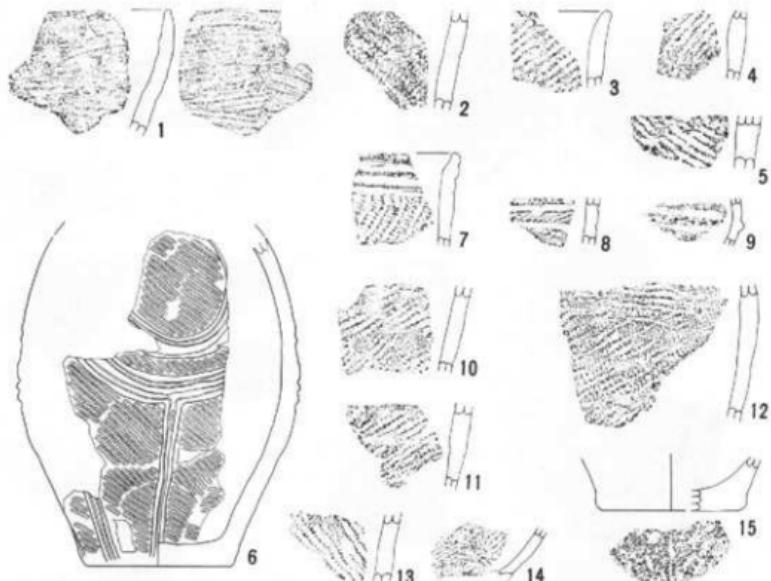
まとめ 金塚Bは1本の磨製石斧から調査が始まり、出土量は少ないが縄文早・前・中期の遺物があり、断続的に使用された痕跡が認められた。金塚Bの遺跡としての広がりは遺物や第Ⅲ層の分布状況から、山際を除いた範囲(2・4Gから7Gまでの平坦面)と考えられる。



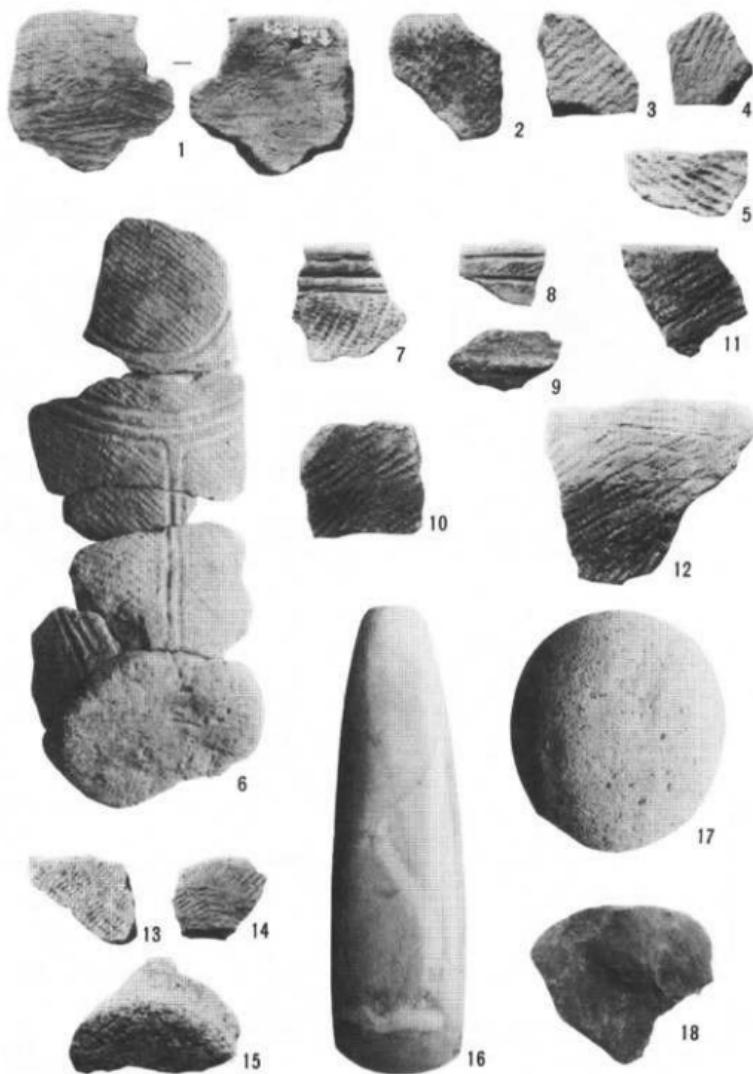
第4図 金塚B遺跡土層柱状図



第5図 金塚B遺跡グリッド図



第6図 金塚B遺跡出土遺物



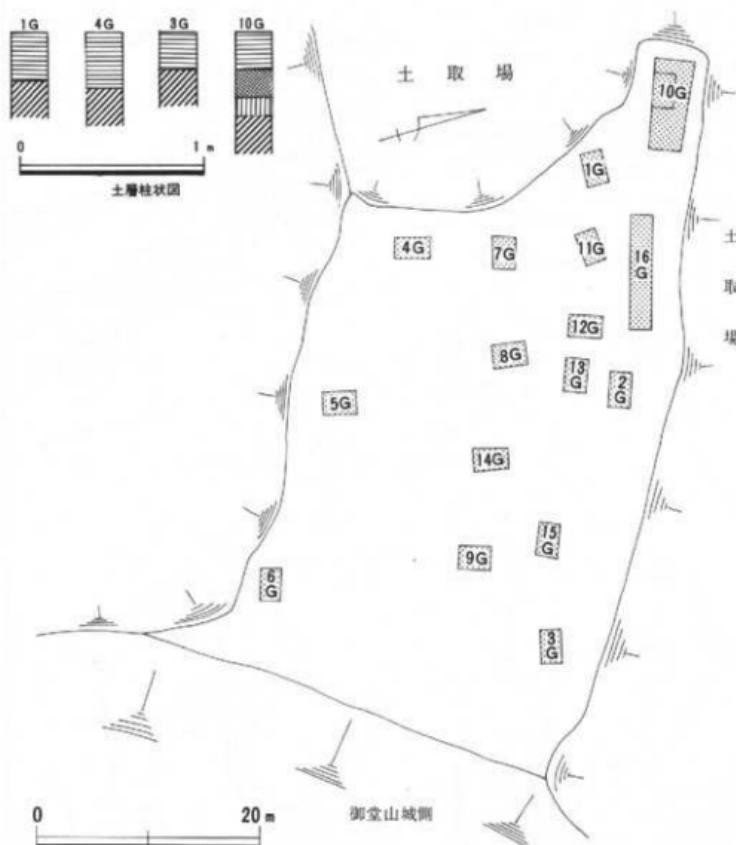
第7図 金塚B遺跡出土遺物

3. キザワシ遺跡（第8図～第11図）

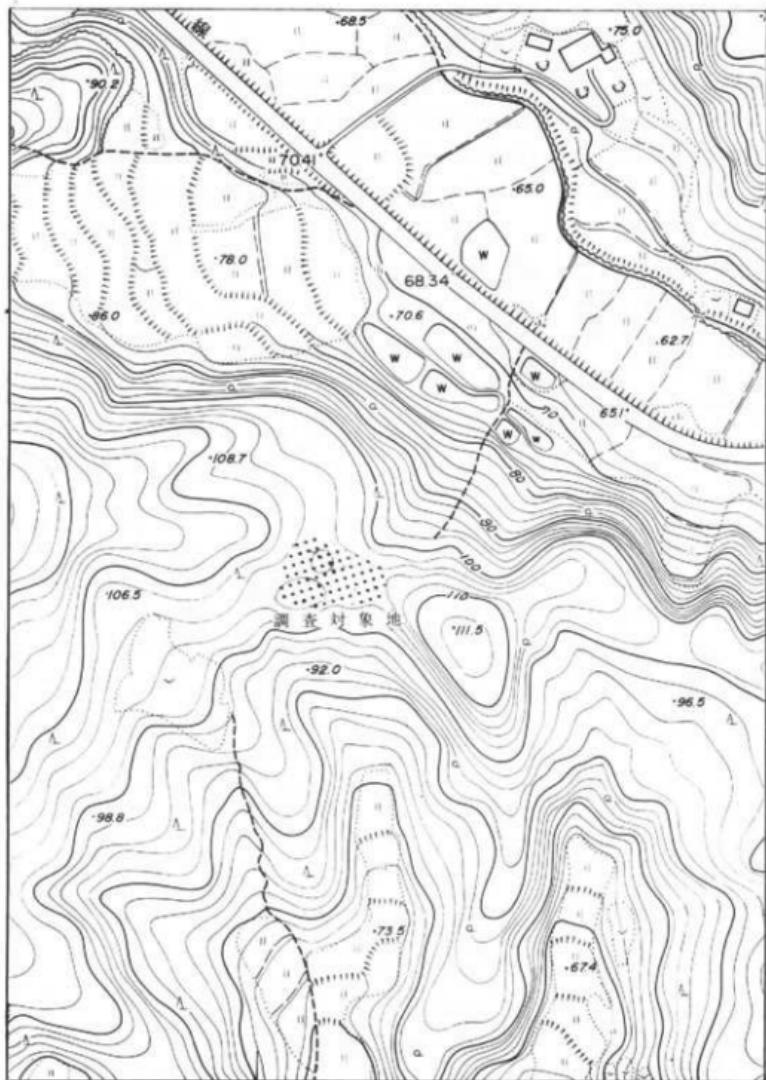
所在地 長岡市大積折渡町字折渡乙 2785

立地（第9図） 大積三島谷町と大積折渡町とを分ける分水嶺をなしている丘陵の尾根上に位置している。東の御堂山城跡とは尾根続きである。標高112m、カヤに覆われた原で、杉や雜木がところどころにみられた。周囲は土取りが行われ地山が露出していた。

調査（8月25日～8月29日） キザワシは1950年代に丸山松夫氏らが発掘を行ったのち、



第8図 キザワシ遺跡グリット図



第9図 キザワシ遺跡周辺の地形図（1／2,500）

1970年代に入ってこの付近で土取り工事が行われるようになった。'70年代後半になって長岡市教育委員会は提出された開発協議書でキザワシ付近での土取りを知り、土取り場からキザワシを除いてもらった。キザワシ付近での土取りはその後、中断されて今日に至っている。今次調査は杉などの木々の間を調査するため、調査グリットは $2 \times 3\text{ m}$ を基本として全域を網羅するように設け、土取り工事が遺跡に及ぼした影響や、遺跡の残存範囲の確認などを主目的にして調査を進めた。

調査の結果 16グリット中で遺物が出土したのは10Gだけで、それも縄文土器の破片が2点という状態であった。10Gはかつて丸山氏らが発掘を行ったと推定される地域で、グリットを拡張して調査を行ったが、ほかには遺物・遺構は発見されなかった。

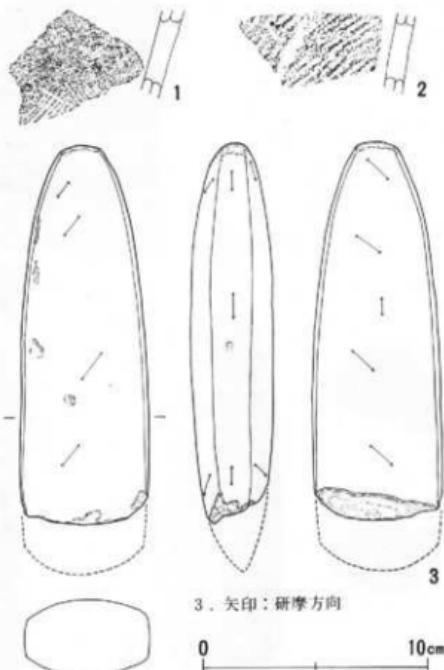
土層序（第8図） 土器が出土した10Gと沢寄りの5・6Gを除いたグリットは20~30cmの表土の下はすぐに地山で第II層の黒褐色土はみられなかった。10Gには第II層が15cmほど堆積しており、これが遺物包含層かと思われる。なお、5・6Gは60~80cmで地山になる。

遺物（第10図・11図） 遺物

は10G出土の縄文土器が2点と7月の分布調査の際に10G付近で採集した磨製石斧が1点あるだけである。

1は櫛描き文の土器で、縄文後期前葉の三十幅場式の土器と思われる。磨製石斧は部分的に敲打痕が残り、石材は安山岩を使っている。

まとめ キザワシ遺跡は試掘調査で、遺物包含層と思われる第II層の堆積が10Gにしか見られないことや調査対象地の周囲には土取り工事が行われていたことなどから、10Gより西および北に遺跡が広がっていたが、'70年代の土取り工事ですでに消滅していたものと考えられる。



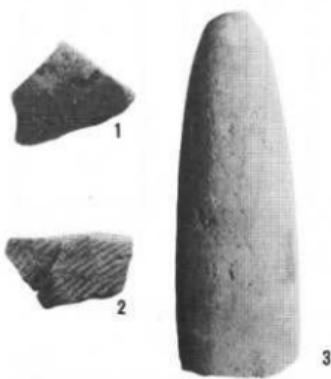
第10図 キザワシ遺跡出土遺物



遺跡近景
(調査地の周辺は土取りで削平
されている)



発掘調査風景



発掘した調査グリット

第11図 キザワシ遺跡

4. 百合畠遺跡（第12図～第14図）

所在地 長岡市大積熊上町字芝田乙 335-11～15

立地（第12図） 東西に延びる丘陵の東側の先端部に位置し、眼下に熊上川が流れている。

標高は75m前後。現況は杉の植林地と荒地であるが、戦前には百合を栽培していたという。

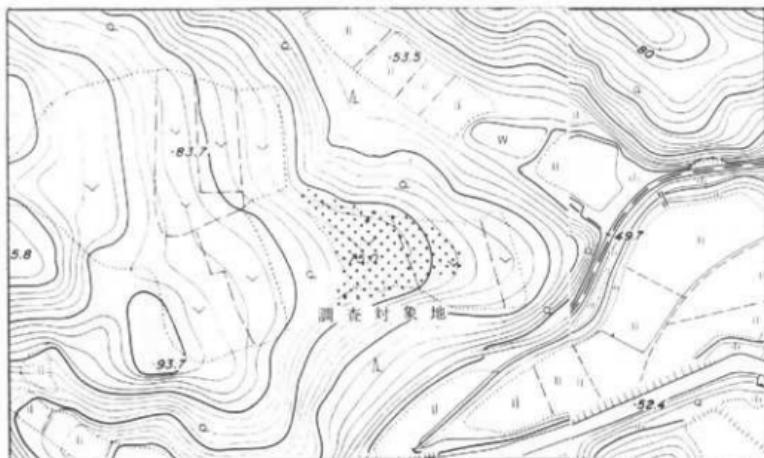
調査（8月31日～9月3日） 1950年代に磨製石斧が1点だけ採集されていた遺跡で、遺跡か否かの確認を主目的に調査を行った。調査グリットは2×4mを基本に荒地の茅藪に設けた。杉林の中は図示はしなかったが、土層の確認のために小規模なテストピットを開けた。

調査の結果 調査グリットは11ヶ所に設けたが、近代の炭焼き窯が1カ所確認された他は、1点の土器片すら出土・採集されなかった。

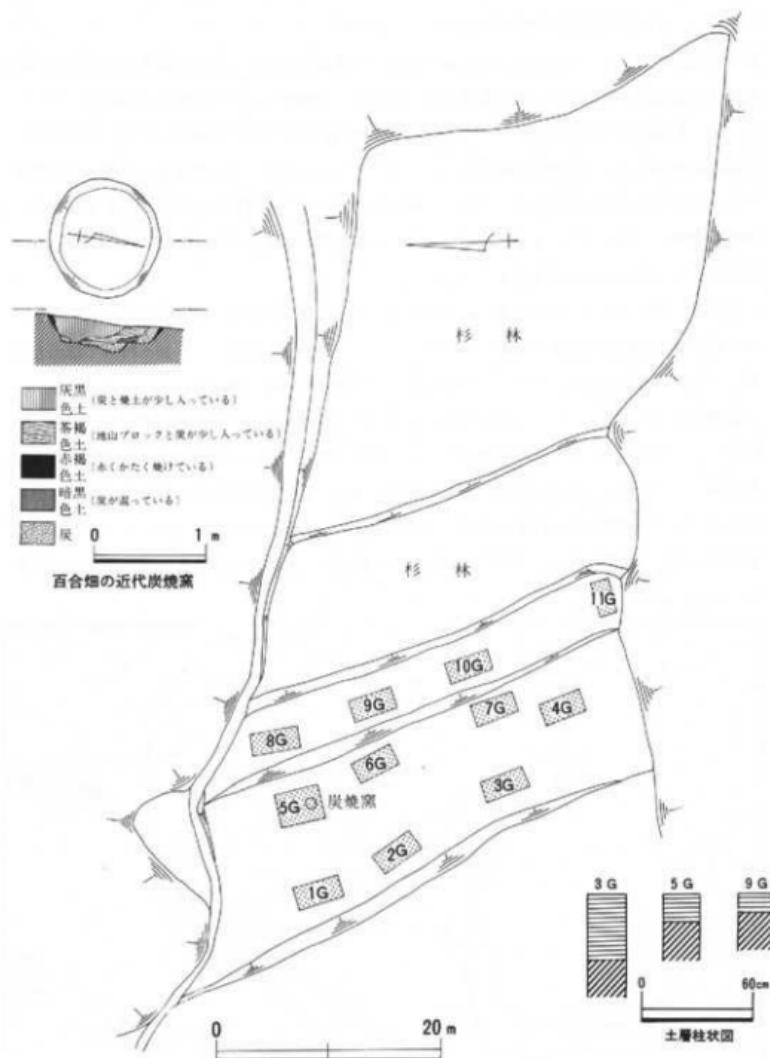
土層序（第13図） 35cmで地山に到達する3G以外は10～15cmの表土の下は地山となる。これは遺物の分布状況をも併せて探った杉林の中のテストピットも同じで、10cm内外で地山となり、一般的に遺物包含層と考えられる黒褐色土の堆積はみられなかった。

炭焼き窯（第13図） 百合畠の遺構はこの近代の炭焼き窯だけである。地元で炭焼きの経験がある作業員によれば、この規模の窯では自家用の黒炭を1回の操業で3俵出す程度と言う。

まとめ 百合畠は1点の土器片すら出土せず、また、遺物包含層がみられないことなどから、百合畠はかつて磨製石斧が採集されているものの遺跡とは考えられないと言わざるを得ない。磨製石斧が1点採集されていたが、昭和50年の試掘調査で遺跡でないとされた「馬平遺跡」と同じ状況である。



第12図 百合畠遺跡周辺の地形図（1/2,500）



第13図 百合畑遺跡グリット図



第14図 百合烟遺跡

5. 焼山遺跡（第15図～第23図）

所在地 長岡市大槻熊上町乙434

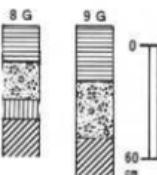
立地（第16図） 東西方向の丘陵から南に突き出た尾根上に位置している。かつては畠で、現在ではカヤバになっている。標高は134m。

調査（9月7日～9月12日） 焼山は1950年代の畠作中に縄文土器が発見され、その後丸山氏らが発掘を行った。その後畠は耕作放棄されて地主の猪飼氏がブルトーザーで整地をしたという。最近では焼山の尾根に通じている沢が産業廃棄物の処理場となって埋め立てが始まった。このため、遺跡の残存状況の確認と、産業廃棄物処理場との関係の把握などを目的に調査を実施した。調査は比高2.5m差で2段に別れている平坦面の両方に調査グリットを設定し、遺物が出土したところは拡張していった。

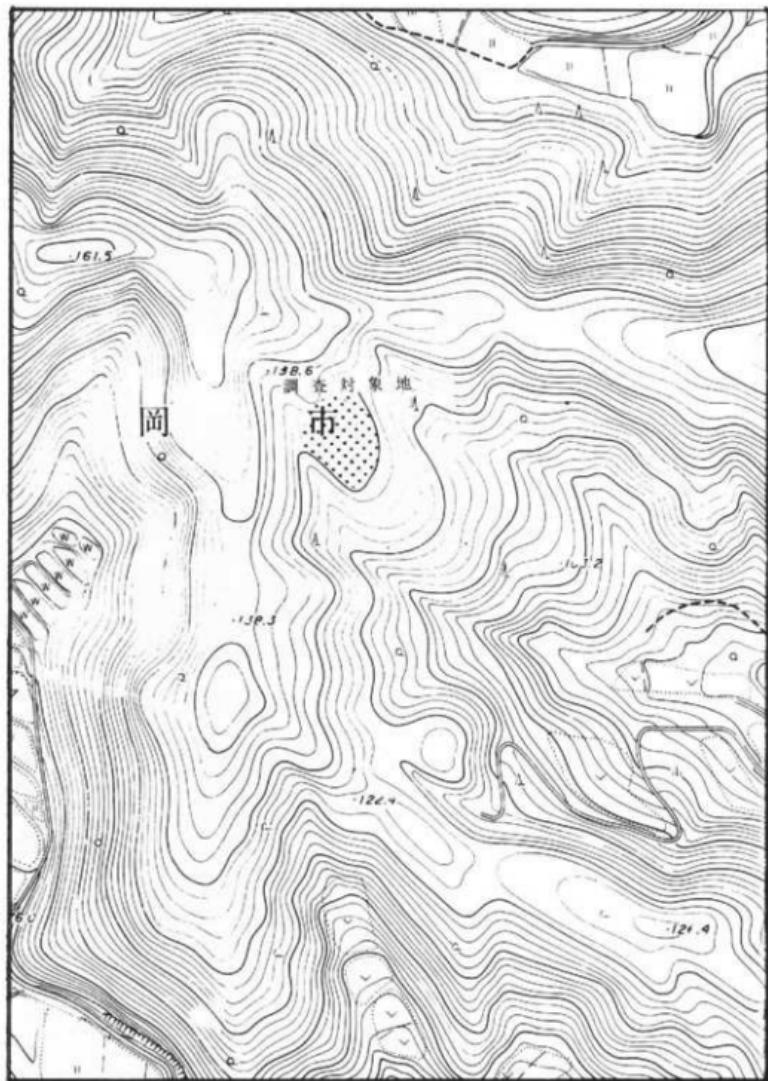
調査の結果 計20グリットを設定して遺構・遺物の確認を行った。遺物は上段の5G付近で縄文土器が約250点、下段では7・8Gで縄文土器が6点出土した。ピットなどの遺構は上・下段ともまったく確認できなかった。

土層序（第15図・第19図） 上段の尾根線中央の1・17・4G付近では表土がなく、地山が露呈していた。上段での表土面から地山面までの深度は、3Gで40cm、5Gでは1m以上である。5Gが地山まで深いのは、地山が傾斜しているうえに、遺物包含層と考えられる第II層がなく、地山漸移層の第IV層の上に地山と表土が混じった擾乱の第V層があるためである。中央部で地山が露呈し、5Gに擾乱層があることは、ブルトーザーでの整地が主に尾根線から東の沢に向かって行われ、その結果、遺物を含んだ表土と地山とが削られて5Gの方へ運ばれたと思われる。その一つの表れが同じ第V層中で土器が30cmもの間隔をおいて出土したことであろう（第17図下の「土器出土状況」の写真）。この現象は急激な土砂の流出以外には考えつかない。また、下段で段の下端に近い7～9Gにも擾乱の第V層がみられ、地山が段の下端方向に傾斜していた。下段の土砂は若干粘質を帯びていた。地山が傾斜し、粘質を帯びた土砂が堆積していることは、上段と下段との間に沢の存在を推測させる。昔当地で耕作をしたことがある調査作業員の話では、沢があったと言う。土層状況と整合する話で、下段も整地されたものと考えられる。

遺物（第20図～第23図） 焼山からは縄文土器だけが出土し、石器などは出土しなかった。縄文土器は前期前半が主体的で、上段の5Gを中心とした傾斜地から出土している。その他、中・後期の土器が若干出土した。1～37は胎土に植物纖維混入の土器で、羽状縄文などが施されている。1～3・5～15はRL、4～16～24はLRの単節縄文が、25～29は0段多条のL_fが、30～33は結束第1種の羽状縄文、34～35は無結束の羽状縄文、36～37は結束第2種



第15図 土層柱状図



第16図 焼山遺跡周辺の地形図 (1 / 2,500)



遺跡近景



発掘調査風景
(中央に産業廃棄物処理場・中央後方に
土取場がみえる)

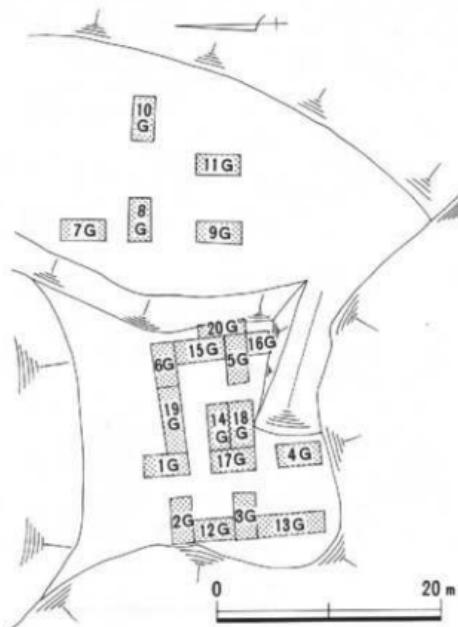


縄文土器出土状況
(上と下の土器の出土位置に30cmの
間隔がある)

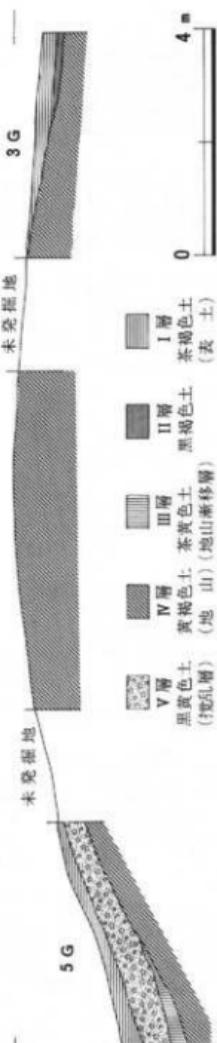
第17図 燃山遺跡

のR Lを縦方向に施文している。なお、1～4の縄文は口唇部から施文が始まっている。38～47は胎土に繊維を含んでいないが、文様の施文方法などに繊維土器との共通点がみられるところから、前期前半の仲間にいた。38・39はR L、40・41はL R、42は0段多条(L $\left\{ \begin{smallmatrix} f \\ t \end{smallmatrix} \right\}$)、43～47は結束第1種の羽状縄文が施文されている。この繊維土器の一群は縄文原体や施文方法などから黒浜式期に相当するものと考えられる。48～53は縄文中・後期の土器で、48は接杉状の文様がある中期後半の土器、49は横状把手が退化した三十稻場Ⅲ式土器で、53は網代痕の底部である。

まとめ 焼山遺跡は長岡市内では数の少ない縄文前期前半を主体とする遺跡である。がしかし、土層の観察や土器の出土状況。それに土地所有者や焼山で耕作をした作業員の話などを総合すると、ブルトーザーでの整地によって遺跡はすでに削平されたものと考えられる。

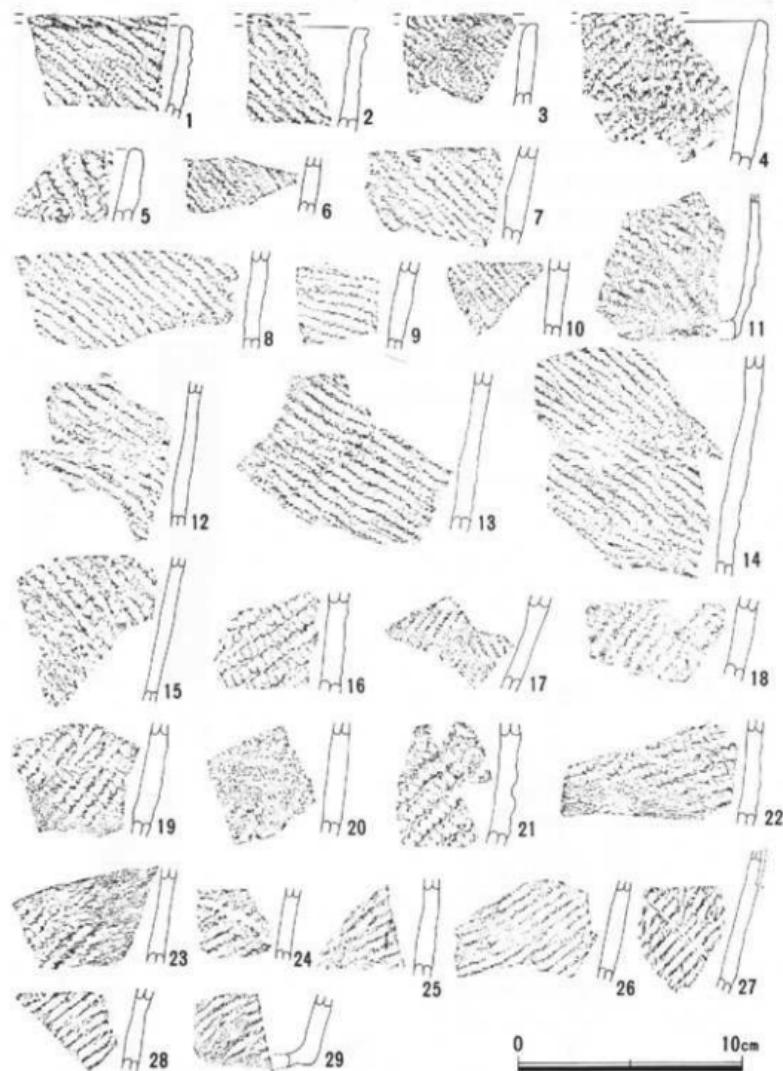


第18図 焼山遺跡グリット図

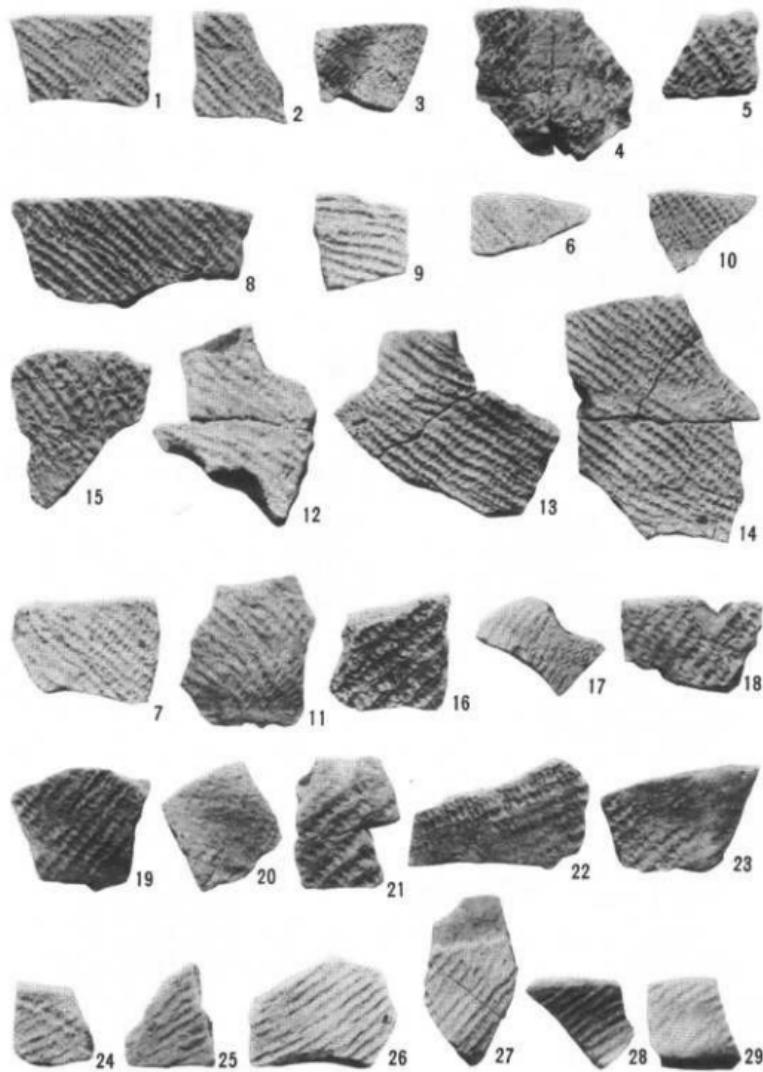


第19図 焼山遺跡

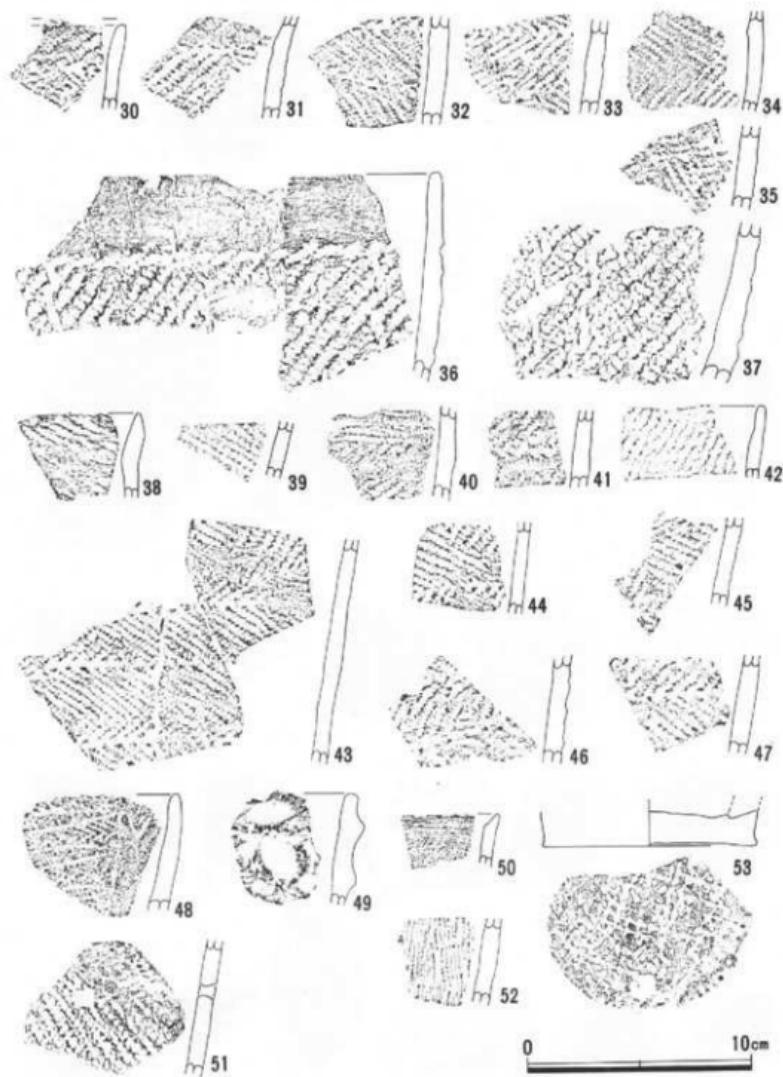
土層断面図



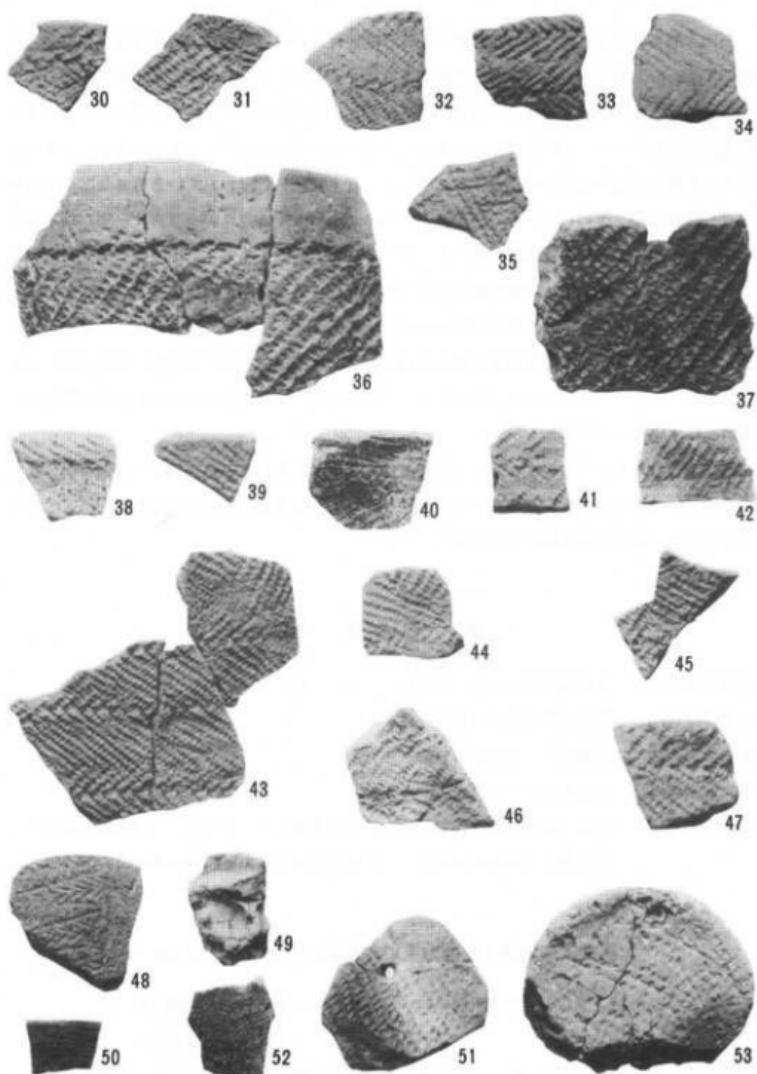
第20図 焼山遺跡出土土器(1)



第21図 燃山遺跡出土土器(1)



第22図 焼山遺跡出土土器(2)



第23図 焼山遺跡出土土器(2)

6. おわりに

長岡市教育委員会では土地の現状変更を伴う開発行為との調整協議の資料作り等を目的に昭和62年度から試掘調査を含む遺跡確認調査を実施することになり、今年度は長岡市西部の大積地区を対象に行った。大積地区的遺跡は山間に所在するが多く、耕作放棄によってかなりの遺跡がその所在すら不明になっていることが多いことは前に述べたとおりである。今次調査もまず遺跡所在地の確認から始まった。そして、近くで開発が行われている遺跡などから試掘調査を実施することにした。その結果は前に述べたように、新発見の金塚Bは一部が削平されているが、遺跡の残存が確認されること、キザワシは土取り工事すでに遺跡が消滅していること、百合畠は昭和50年に新潟県教育委員会が調査した馬平遺跡と同様遺跡でないこと、焼山はブルトーザーでの整地で削平されていることが確認された。そして、金塚Bでは縄文早期後半や前期前半、焼山では前期前半の資料が得られた。長岡市内ではこの時期の遺跡が少ないだけに、有意義な資料が得られたと言えよう。今後大積地区での遺跡のあり方を研究する際の一資料になれば幸いである。

確認調査は今年度から始まったばかりである。来年度もよりよい開発調整の協議資料として、さらには研究にも資することのできる資料作りを目指して調査を進めていきたいと思っている。多くの方々の御協力をお願いする次第である。

調査体制

調査主体者	長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）
調査担当者	駒形敏朗（長岡市教育委員会）
調査協力者	小熊博史（長岡市市史編さん室）
調査作業員	地元老人クラブ有志
調査事務局	田中 蝶（長岡市教育委員会社会教育課長）、清水正一（同課課長補佐） 鈴木孝行（同課庶務係長）、芳賀代志栄・松田英也（同課課員）

調査に御指導・御協力をいただいた方々（五十音順）

五十嵐タイ・猪飼 進・太田信男・桐生敏一・桑原惇夫・平沢雅和・山田勇治

（以上土地所有者）

太田教治・岡本郁栄・小林正紀・高野昇平・柄倉末作・堀一之進・丸山松夫・安原嘉夫

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

金塚B遺跡・キザワシ遺跡・百合畠遺跡・焼山遺跡

昭和63年3月22日印刷 昭和63年3月30日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：㈱第一印刷所中越営業所 新潟県長岡市神田町2丁目1番地9
